

## 特集にあたって

濱田 琢司 (南山大学)

『人類学研究所 研究論集』第2号は、2014年7月5日に人類学研究所にて開催された5大学研究所連合公開研究会「民具と民芸」の内容を中心としたものとなっている。この研究会は、成城大学民俗学研究所、國學院大學折口博士記念古代研究所、神奈川大学日本常民文化研究所の在京3大学の研究所の間で始まった連合研究会をもととし、2013年度に愛知大学総合郷土研究所が主催となり、同大にて連携シンポジウムが開催された際に南山大学人類学研究所も加わり、5大学連合研究会となったものである。2014年度は、南山大学が担当校となり、「民具と民芸」をテーマとした公開研究会を、上述の通り、人類学研究所にて実施した。

本特集号の複数の論文においても言及されているように、民具と民芸とは、ともに、大正から昭和初期という同じ時期に発生した対象である。民具は、渋沢敬三のアチック・ミュージウムの活動とそれに連なる動きのなかで、民芸は、柳宗悦の民芸運動を通して、それぞれに類似したモノに、しかし異なったベクトルを持ったまなざしが向けられることで、分類され、価値付けられていった。それぞれを大雑把に位置付けるとするならば、前者は生活・生業用具、後者は諸工芸となるだろうか。しかし、いずれも前近代に起源を持つ「民衆的」で「伝統的」なものを対象としていたために、具体的な収集品も含めて、様々な側面において重複するところが多い二者なのである。そうした類似性は、一方においては、両者の対立の要因ともなり、戦後になると、特に民具研究者の側から民芸への批判的な意見や、民芸との別を強調するような意見もしばしば見られるようになった。1960年代から70年代にかけての「民芸ブーム」と呼ばれる民芸の消費ブームに、民具が巻き込まれてしまったことなどがその背景にあった。

しかし、1990年代になると、民芸運動や柳宗悦についての学術的な研究が増加したこともあり、両者を分析的に比較し検討するような機会も増えていった。2001年に開催された民族藝術学会の年次大会「特集 民具と民芸」もその一つであった。その内容をまとめた『民族藝術』の特集号(第18号、2002)では、国立民族学博物館に受け継がれているアチック・ミュージウムの旧コレクションと日本民芸館の収蔵品との具体的な類似を示してみせるなど興味深い試みもみられた。

それから10年強ほどが経過し、民具、民芸ともに新たな視点からの研究蓄積がみられるようにもなった。また、近年では、文化人類学や地理学、民俗学、あるいは美術史学等の人文・社会諸科学において、マテリアルなモノへの関心が高まっているという状況もあり、民具や民芸は、そのテーマとしても有効な対象であるといえるだろう。

こうした状況を踏まえ、公開研究会においては、「民具と民芸」という対象を広く解釈しつつ、民具と民芸を中心としたモノ・物質文化をテーマとして報告と討論が実施された。濱田(南山大学人類学研究所)が民具と民芸の関係を、民芸を中心としながら概観したの

ち、佐野賢治（神奈川大学日本常民文化研究所）が「民」をキーワードとして渋沢敬三と柳、柳田國男らの思考を整理し、小川直之（國學院大學折口博士記念古代研究所）が折口信夫の物質文化への関心を紹介した。また、印南敏秀（愛知大学総合郷土研究所）は京都のタケノコ掘りの道具「ホリ」を「美」という視点から考察する可能性を示し、小島孝夫（成城大学民俗学研究所）は、自身の研究史とともに民具研究を基軸とした発表を行った。本研究論集では、これらの報告をもととした論考とともに、公開研究会においてコメントーターを務めた角南聡一郎（公益財団法人元興寺文化財研究所）が民芸運動と台湾原住民の工芸との関わりを、また後藤明（南山大学人類学研究所）がアメリカ民俗学におけるフォークアートの位置付けとその研究動向を、加藤英明（南山大学大学院人間文化研究科博士後期課程）が町工場の機械工を事例に、民具や民芸という枠の中で「機械」を理解するための可能性を提示している。

濱田論文においても簡単に触れているように、民具と民芸とは、近年になってもなお、積極的な比較研究の対象となることは多くない。本特集も十分にそれが実現できているわけではないかもしれないが、同時に、民具と民芸を端緒として、より大きな視点から、モノや技術、機能を捉える論考が含まれることで、民具研究、民芸運動研究のそれぞれの深化とともに、新たなモノ研究への展望も見出すことができるものとなっている。これを受けて、さらに深く民具と民芸を交差させる試みへと展開できることを望みたい。